

年間を見通した 評価計画の重要性



かとう ひろ ゆき

加藤拓由

岐阜聖徳学園大学准教授。

光村図書 小学校英語教科書『Here We Go!』編集委員。

著書に『小学校英語「5領域」評価事例集』(共著／教育開発研究所)など。

山川先生は、年間を通じてバランスのよい評価計画を立案しています。右の表は、九条塔南小学校が、内容のまとまりごとに「記録に残す評価」を、年間でどれくらい行っているかを一覧にしたものです。「聞くこと」の活動の割合がもっとも多く、次に「話すこと[やり取り]」「話すこと[発表]」、そして「読むこと」「書くこと」の割合は少なくなっています。学習指導要領でも、「音声で十分に慣れ親しんだ表現を、読んだり、書いたりする」と記されています。このように、年間を見通した評価計画を立てることで、教師は、場面を精選し、より効果的に指導と評価を行うことができるのです。

また、「話すこと[やり取り]」はUnit1とUnit2を合わせて指導し、Unit2の終わりにALT(JTE)との個別のインタビュータイムを設けています。単元をまたいだダイナミックな評価計画を立てることで、児童はロングスパンで繰り返し表現に出会い、より深い言語活動を行うことが可能

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度	合計
聞くこと	9	8	8	25
話すこと [やり取り]	6	6	6	18
話すこと [発表]	3	3	3	9
読むこと	2	2	2	6
書くこと	2	2	2	6
合計	22	21	21	64

「記録に残す評価」の年間実施回数

になります。

さらに、【主体的に学習に取り組む態度】の評価では、具体的な活動の振り返りをCAN-DO形式で自己評価させ、児童のメタ認知を促進し、自ら目標を設定させます。粘り強く学習に取り組ませることで、児童の学びに向かう力を伸ばす工夫が見られます。



山川拓先生の実践(p.3～7)の関連資料は、
光村図書ウェブサイトよりダウンロードすることができます。

紙面で紹介されている資料に加えて、
振り返りやパフォーマンス評価のための資料などもございます。ぜひご覧ください。